浮世絵館だより

北斎と門弟たちの藤沢・江の島

藤沢市
藤澤浮世絵館

2024 年
1 月
WEB 版

魚屋北溪「江島記行 藤沢」
天保初期（１８３０ ―１８４４）

今回は少し視点を変えて、有名な葛飾北斎本人ではなく、３人の門弟たちの作品を紹介します。

一人目は、魚屋北溪（安永９年―嘉永３年（一七八〇―一八五〇））です。雅号は「とと や ほっけい」と読みます。北溪自身身が魚屋を営んでいたことと、江戸時代は魚のことを「とと」と呼んでいたことから、この雅号が生まれたといわれています。

藤沢市が所蔵する北溪の浮世絵は、一般的に販売された大判サイズはなく、ほとんどが摺物と呼ばれる私家版の浮世絵です。これは江戸時代に庶民の文学として多くの人々が楽しんだ、俳句や狂歌などのグループによる依頼で作られ、お祝いや正月の挨拶などおめでたい席で配られていたといわれています。そのため販売用の浮世絵よりも摺られた数は少なく貴重です。形態は正方形に近いものが多く、紙質が良く、絵具は金泥（きんでい）や銀泥（ぎんでい）なども使われています。また、摺りの技術も、紙に凹凸をつける空摺という技法が使われ、贅沢なつくりになっています。北溪は、師の北斎をしのぐほどこの摺物を作成しており、また作品も風雅に富んでいて、現在の私たちが見ても興味を惹かれる絵柄が多くあります。中でも、藤沢、江の島にちなんだ「江島記行」シリーズは、江の島詣の道中の名所や名産を描いており、当時の参詣の楽しみ方を見ることができます。例えば上の図は、江戸時代、藤沢の名産品であった松露（しょうろ）（食用のキノコに似た菌類）の買い付けを行う商人が描かれています。このように、このシリーズは、藤沢市にとって、郷土の歴史を垣間見ることができる貴重な資料でもあります。

柳々居辰斎　「相州七里浜」　文政年間（１８１８－１８３０）

二人目は、柳々居辰斎（生没年不詳）です。この雅号は「りゅうりゅうきょしんさい」と呼び、北斎と同じく師事していた琳派の俵屋宗理から贈られた雅号といわれます。この「相州七里浜」は、当時の流行でもあった西洋絵画の影響を色濃く受けており、絵の周囲には油絵の額縁を模した縁取りがされています。この縁取りに見られる文字は、当時鎖国していた日本との貿易が許されていたオランダの東インド会社のマークであるVOCやHOLLANDの英字が記されています。

この絵のように、近景に七里ガ浜、中景に江の島、遠景に富士山といった奥行きを感じさせる作品は、師の北斎や一門の絵師にも多く見られました。当時、西洋絵画技法の第一人者であった司馬江漢の「相州鎌倉七里浜図」も同様の画角で描かれており、西洋絵画による遠近法の再現を試みるのに、七里ガ浜から江の島を眺める景色が最適であったことがうかがえます。

「題名不詳（江の島弁財天鐘）」も摺物で、金泥や空摺も用いられ優美な仕上がりとなっています。鐘に巻き付く白蛇は弁財天を象徴する宇賀神（蛇の神様）です。

六十年に一度行われる洪鐘弁天大祭（おおがね べんてん たいさい）が、二〇二三年に鎌倉の円覚寺と江島神社の共同で実施されましたが、この絵は主役である大鐘を連想することもでき、江島神社の長い歴史が伝わる文化の奥深さを感じさせます。

柳々居辰斎
「題名不詳（江の島弁財天鐘）」
文化６年（一八〇九）

池田東籬（とうり） 作　葛飾戴斗 挿絵
「絵本通俗三国志」六編巻十巻から抜粋

三人目は葛飾戴斗（生没年不詳）です。雅号は「かつしかたいと」と呼びます。戴斗は、但馬（たじま）国（現兵庫県）豊岡藩小笠原家の藩士という武士の生まれで、のちに葛飾北斎に師事し、絵師となりました。最初は斗円楼北泉（とえんろうほくせん）と名乗りました。

雅号の「戴斗」は、雅号の変名を重ねた北斎が文化8年（一八一一年）頃から文政2年（一八一九年）頃まで使っていたものを譲られたので、正確には二代目の戴斗となります。

画風は、北斎の稠密な描写を受け継いでおり、画面の隅々まで細かく描いています。「絵本通俗三国志」は、戴斗が挿絵を描いた版本の代表作でもあり、天保7年から12年（一八三六―一八四一）まで75巻で刊行されました。原本は羅貫中（らかんちゅう）による「三国志演技」で各シーンが劇的な描写で描かれています。上の図は、三国志の中でも有名な《泣いて馬謖（ばしょく）を切る》です。このシリーズは、現代でも戴斗の挿絵のまま復刊されたことがあり、当時からの人気の高さがうかがえます。